

■春日部福音自由教会 2020年8月23日 11:00 中央会堂礼拝（ライブ配信礼拝）
■聖書 II ペテロ 3章 8-13節
■説教 「キリストの忍耐」 山田豊協力牧師

おはようございます。だんだん暑さが残暑とはいえ厳しくなって、今日は少し温度が下がってるようですが、いつまでマスクを付けながら集ったり生活をしなきゃいけないのかな、もういいかげん何とかしてくれよというような、そんな思いじゃないかと思います。改めて耐え忍ぶこと、しばらく忍耐の時が必要なのかなと思わされます。今日は「キリストの忍耐」という題で、ペテロの手紙第二、3章のお言葉に心を向けて参りましょう。

お祈りをささげいたします

私たちの天の父なる神様。あなたの聖なる御名を賛美いたします。神によって創られた世界は、人の一生のようにやがて終焉の時を迎えます。今私たちが経験している災禍もそのしるしの一つかもしれません。しかし人間の考えではなく、神の言葉である聖書から私達にあなたの御心を教えてください。人となったお言葉である主イエス様によって私たちを導いてください。今朝この会堂に集われたおひとりおひとり、またそれぞれの家で礼拝を守っている兄妹姉妹に、主イエス様の平安があり、安心して新しい週を歩むことができますようにお守りください。聖霊のとりなし、助けのあることを信じ、主イエスキリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン。

I 数えてみよ主の恵み

教会で歌われる賛美歌のひとつに「望みも消えゆくまでに」という歌がございます。その賛美歌の中心的なことは“数えてみよ主の恵み”ということだと思えます。いろいろな困難がある、辛いことがある、押しつぶされそうになる時に、もう一度自分の生活あるいは周りを見て一つ一つのことを見てみると、「ここにも主の恵みがあった」「これも神様の恵みだった」と、そのように覚えることができるではないか、“恵みを数えてみなさい”というのがこの賛美歌の一つのテーマであると思えます。

いかがでしょうか。今日ここに来られて先週一週間あるいはこのしばらくの日々の生活を思い返して、神様の恵みをどれくらい数えることができるでしょうか。礼拝の時ですので改めてそのような時を今持つことはできませんけれども、私たちはひよっとしますと恵みの数ではなくて、毎日毎日ニュースで流される「今日は何人であった」「東京は何人であった」そういった数字に心が行ってしまって、大切な神様の恵みを見落としてしまっていないでしょうか。春日部市民の方であれば、春日部市のホームページを見て「わあ百人越えだ」とか、「なんか今日、やばいことが起こるらしいよ」何ていうようなことで不安に駆られている方も、ひよっとしたらあるかもしれません。私たちの周りには、自分の心を荒立てるような出来事に事欠かないわけであります。ある意味毎日死と隣り合わせになっています。

これはコロナだけではなくて、特に今年は非常に暑い日が続いていて熱中症や、あるいは川とか海と

かいわゆる水の事故で、大切な尊い命が失われていってるということを聞くわけです。自分も子供の頃は川で泳ぎましたし海でも泳ぎましたし、ある程度歳がいったからは山に入って、池とかそれこそ湖で泳いだことがあるわけです。山の池とか湖は表面は暖かいんですけども、立ち泳ぎをすると冷たいんですね。ものすごく冷たい。そういうこと知らずに入りますと、本当に命を落としかねないというような危険があるわけで、そういうニュースを聞くたびに心が痛みますけれども、自分は何とかあの時は無事に過ごせたんだな、これも主の恵みかしらと思わず数えてしまうわけです。

Ⅱ 困難ななかにあって、終わりの日に備えよ

危険と隣り合わせ、死と隣り合わせなんてことも、本当に日常の中にいろいろ転がっているわけです。そういう中で今日は改めて皆さんと、このペテロの手紙第二の3章の言葉を聞いております。

ペテロの手紙は、困難の中にあるキリスト者を励ますために書かれました。特に第一の手紙にはそのことがよく表されています。第二の手紙の方は、偽りの教え、偽りの教師が教会に入り込んで兄妹姉妹を惑わしている、偽りの教えを糾弾し神様の正しい教えに一人一人を立ち帰らせる、そのような目的をもってこの手紙は書かれました。

今日はその中の3章の8節から開いているわけですがけれども、8節を見て頂きますと、よく知られた言葉が書かれてあります。「しかし愛する人たち。あなた方はこの一つの事を見落としてはいけません。主の御前では1日は千年のようであり千年は1日のようです」。1日は千年のようである。千年は1日のようである。ある意味文学的な表現かもしれませんが。時間、時とは一体何だろうか。科学者でなくても不思議だなと思うことがあるわけです。子供の頃はもう1日がたっぴりあったと、一年が長かったかなと思っていたこともある。ある年齢を超えますと「なんだかんだやっているうちにもうこんな時間で寝なきゃいけない」「1年間あっという間に過ぎ去ってしまった。早いなあ」。この時の感じ方の違いを痛感させられるわけです。この8節は、神様の働きというものは人間の時間感覚では測れないものであるということを強調している言葉であります。これが次に語る事の一つの前提となっているわけです。

9節10節をお読みしますと、「主は、ある人たちが遅れていると思っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまう。」ここで語られている主の日というのは、この地球も含め私たちの天と地が終わりの日を迎えること、終わりのこと、終末の日のことでもあります。そしてそれはまた主イエス様が再びおいでになる再臨の日であると。それをここでは主の日と言っております。主の日は盗人がやってくるように、泥棒がやってくるように、そのように主の日はやってくる。どうしたことなのでしょうね。

皆さんのお家でも、泥棒に入られないようにセキュリティをかけている方もあるかもしれません。カメラをつけるだとか、センサーがついていてパッとライトを照らすだとか、ワンドアツーロックという

ようなことでロックしている。それでもやられてしまうことがあります。これはですね、あまり大きな声では言えないんですけども、実際に被害にあった者じゃないとちょっとわからないかもしれません。

要するにここは、主の日はいつ到来してもよいようにしっかりと備えていなさいということです。そんなこと言ってもまだイエス様来ないではないか。来臨の日が来るとか言われている、しかもこの手紙が書かれたのは紀元1世紀、あれからもう2000年近くも経っていて、やはり主の日はないじゃないか、まだ天地も無事だし、まあ異常気象で暑いとか言われているけれども。

しかしながら神様の前には一日は千年のようである、千年は一日のようである。我々の時間感覚に神様は左右されることないんですね。いつその日が到来してもいいように、しっかりと備えていなさいと語っているわけです。科学者も、この宇宙の終わりはいつか来るだろう、銀河系太陽系もいつか終わりが来るだろう、ブラックホールのようなものに飲み込まれてしまうのかもしれないとか。そういった話を、皆さんもテレビの番組で見たり本を読んだりされていると思います。今まで経験したことがなかったような天変地異に襲われるというようなことがあるんでしょね。

大事なことは、そのしるしを見るということです。ルカの福音書の21章11節のところに、イエス様は、この主の日は来ることこの世の終わりの来ることを語る中でしるしについて言及されましたが、ルカの福音書の21章の11節にはこう書いてあるんです。「大地震があり、方々に疫病や飢饉が起こり、恐ろしいことや天からの凄まじい前兆が現れます。」マタイもイエスも言われた言葉を書き留めて世の終わりのしるしを書いておられますけれども、ルカの方には「疫病」という言葉が入っています。ルカは歴史家でありお医者さんでもあった。そういったことから、実は「疫病もそのしるしなんだ」と語っているわけです。今私たちが経験しているこの災禍、それは神様の裁きというよりも、私自身はおいでのなる主イエス様の備え、主の日の実現に至るまでの備えをちゃんとしなさいと言うメッセージがあるのではないかと、そのように思っています。喉元過ぎれば熱さ忘れるであってですね、今私たちが経験している様々な苦しみをやはり忘れてはならない。幸いにもこの災禍をクリアすることができれば、再臨の日が延びることもあるでしょうけれども、幸いであるかもしれませんが忘れてはダメなんですね。そこで学んだこと痛みに覚えたことつらかったこと、忘れてはならないんです。

ペテロの手紙に戻っていただきまして、なぜそのようなことを言うかといいますと、もう一度9節をご覧ください。ここに表題に掲げましたように、「主はある人たちが遅れていると思ってるように約束したことを遅らせているのではなくあなた方に対して忍耐しておられるのです」と書いてあります。なにか意地悪をしてイエス様は再び来られることを私たちに対してじらしてるということじゃなくて、忍耐をしているんだ、猶予期間を与えている。その間に何をしますか？ 一人も滅びることなく悔い改めることを願っているんですね。ヨハネの福音書3章16節、今開きませんがそれでも神様のご愛というのは、一人として滅びることなく永遠のいのちをいただくことでした。そのいのちをいただくまで神様は猶予をしてくださっている、待っていてくださる。無理やり私たちを改心させるのではな

くて、「もういい加減気づきなさい、人間の歴史の中で今までも色々な病気と戦ってきた、パンデミックもあった、あなたは学んだはずなのに学んでいるのかい?」。もう一度神様がこの忍耐の時を思い起こし、その時に「私に立ち返りなさい」。それこそ新しい生活なんだ。手指の消毒をすることだけが新しい生活様式なのではなくて、私たちが悔い改めて神に立ち返ることこそが新しい生活のスタートなんですね。その時が来るまで神様は忍耐をして時をある意味止め、神様は待っていてくださるのです。

11 節と 12 節をお読みします。「このように、これらすべてのものが崩れ去るのだとすれば、あなたがたは、どれほど聖なる敬虔な生き方をしなければならないことでしょうか。そのようにして、神の日が来るのを待ち望み、到来を早めなければなりません。その日の到来によって、天は燃え崩れ、天の万象は焼け溶けてしまいます。」

この御言葉、特に 11 節、ちょっと変だなと思いませんか、違和感を覚えませんでしたでしょうか。どうせこの社会がバラバラになってしまうのだったら、真面目に生きなくても好きなことやってそれこそ飲んで騒いでいいじゃないか。いわゆる自暴自棄になってもおかしくはない、そういう文脈であると思うんです。現実にこういう時代のなかでも、「俺はコロナになってもいいんだ」という危険なことをする方もいるみたいですね。ところがこのみことばは、きよい生き方敬虔な生活をするように勧めているわけです。「終わりの日が来るなんて堅苦しいな」と、そんな感じです。なぜこのような勧めがなされているのでしょうか。それは 13 節に理由があります。「しかし私たちは、神の約束にしたがって、義の宿る新しい天と新しい地を待ち望んでいます。」この世界があるいはこの天が崩れ去ったその後には、新しい天と新しい地が開けるんだと語っています。それとそこは神の義が宿るところなんだ、人間の義ではない神様の義が宿るところなので、そこに入れられる私たちはきよくされ神様の義の衣を着ている必要があるんだと言うんです。「罪のない衣を着ていますか」という賛美歌もありましたけれども、きよい国なので神様の前に汚れたもの不義なものは入れないと言うんです。それはですね、道徳的に真面目に、それこそ聖人君子のように生きてないと新しい天と新しい地に入れられないのか、そういうことじゃないですね。そうではなくて、神様が猶予して下さっている間に、悔い改めてごめんなさいと神様にお詫びし、心の向きを変えて主イエス様を信じる信仰が与えられた時に、主の流された血潮によって私たちは罪赦され神の子とされる、そこに救いがあるわけです。私達の努力であるとか今までやってきた様々な功績であるとか、そういったことが新しい天と新しい地に私たちを入れてくれるものではないということです。ただただ神様の憐みと主の赦しのゆえに新しい天と新しい地に入れられるのですね。ですからここが違うところです。この世界が滅びた時に、エンドが来た時にそれで本当にエンドではない、新しい天と新しい地の物語が始まっていくんです。

それはね、科学雑誌などを見ても書いてないですよ、そこは。「そりゃそうですよ先生、そんなの宗教で作り事なのでサイエンスの読み物にそんなの書いたら X ですよ」という声がどこからか聞こえてきそうです。科学がすべてのことを判断するわけではないんですね。人の死はそれで終わりかどうか、その後の世界があるかどうか、はっきり言えば誰にもわからないって言うていいでしょう。神様が

ら教えられることがなければ何ともわかりませんね。

でも私たちは、私達って言った意味は、まあいわゆるこの日本で生まれ育ち、あるいは日本に移住されて長い間住んでる人たちは、日本人が古来から持っていたものの考え方見方感性、あるいは仏教などによって教えられた事柄を無意識の中に持っているのではないかと、そういうところで今言っているんですけども、死んだらあの世に行く、そしてあの世に行った魂はまたお家に帰ってくる、その行事がいわゆるお盆であるわけですね。地域によってそれぞれ違います。

しばらく前朝のウォーキングしている時に、お墓があるところを何箇所か通るんですけども、お墓の前に置いてありましたよ、きゅうりとなすが。知らない方もあるかもしれませんね、それ何ですか。きゅうりは馬を表してお迎えに、先祖の魂を迎えに行く。ナスは牛を表していて、お家に帰ってきたご先祖の魂を、また向こうへお送りするということの象徴として置いてあるわけです。これを理を詰めて考えればなんなのかっていうことありますけれども、それは置いといて、一般的にそれは普通に行われているわけです。ただこの新しい天と新しい地という聖書のことを見る時に、これもまたキリスト者でありながら、はてこれはどういうところなんだろうかと、ちょっと考えてしまいますね。どんなところなんだろうかと。人間は生まれて死んでまた何かに生まれ変わってぐるぐる回っていく、そういうものだろうと大体教えられているわけです。けれどもどうも聖書の示すこのいわゆる終末観っていうのは、直線ではないかもしれないけれども線になっているわけですね。

テレビ番組見ていましたらば、どこかのお寺の住職がこの夏休み、子供達にとっては短い夏休みだったと思いますけども、子供たちを集めて極楽と地獄の話をしている、そういうことが紹介されてました。そのお寺に代々伝わっているいわゆる極楽地獄の絵図を見せて、そして悪いことするとこういう恐ろしい場所に落とされてしまうんだよと子供達を諭しているんですね。そんな風に育った方いますか？私はそんな話聞いて育ったわけです。でもさすがに教会ではちょっと違う教えになります。

私はその番組のニュース見て、「そうだ丘の上の LSC の 8 月の集まりはこれにしよう」と思ったんですね。聖書の語る天国と地獄。そして 1 枚の絵をパワーポイントで映して、黙示録の世界、それが 21 章ですがそのことを話しました。神様の裁きがある。でもイエスキリストによって私達は天国の民とされ、やがて主イエス様がおいでになった時に、新しい天と新しい地が開かれる。その門を入ることができる道をイエス様が開いてくださったということを語ったのです。その時に用いた絵は、藤田嗣治さんが描いた、黙示録という絵です。本物はある美術館にあるのですが、それを使いました。藤田さんは、カトリックの信者でございます。独特なタッチで緻密な絵を描かれる方です。ニュースでみた、あるお寺のご住職が語られていた絵と、その子供たちに見せた黙示録の世界は似ているようだけれども、違いがあるわけですね。イエスキリストの贖いによって、神の民とされる。希望があるのですね。確かに、殺生をしたり、嘘をつかずにすごしたりすることは、必要なことで、当然そのように生きるべきです。でもそれが出来ない私達であっても、主イエス様は私どもを赦し神の子としてくださって正しい行いに歩むように、その行いを備えてくださったのです。新しい天と新しい地が開かれている。この

世界の終わりは、文字通りのエンドではなく、新しい天と新しい地の始まりであること今朝、心に留めていただきたい。そしてそれこそ私たちの望みなんですね。希望なんですね。イエス様ご自身も、神様の忍耐をもって、私達の事を守ってくださるように、私達も忍耐をいただいて、歩むことが出来るわけです。

Ⅲ 結び 使徒ペテロの生涯から

ひとつの御言葉を今日の結びとして、開いてみましょう。再臨の事を多く語っているテサロニケ人への手紙第Ⅱ章 3 節 5 節です。「主があなたがたの心を導いて神の愛とキリストの忍耐に向けさせてくださいますように」。

今日お互いキリストの忍耐に私たちの心をむけさせていただきたいと思います。御言葉を閉じるにあたって、この手紙の著者であるペテロのことを思い起こして閉じることといたします。このペテロの手紙は誰が書いたのか？ペテロの手紙著者問題とは、神学校で扱うテーマなんですけれども。私たちはこのペテロの手紙にも書いてあるように、また伝統的な保守的な学者のように、このペテロの手紙第一も、第二も、著者はイエス様によって召された使徒ペテロである。そういうことで理解しております。

ペテロという人について、いろんなこと皆さんも知っておられると思います。「人間を捕る漁師になりなさい」というお言葉。「人間捕る漁師ってなんだろな?」。不思議に思ったと思います。今まで魚をとっていたからですね、それを人間を捕る漁師にされる。「イエス様は面白いと言われるな、このお方について行ったらなんとかなるかもしれないな」と思ってついていったのかもしれない。

このペテロという人は、失敗も多くやった人なんです。今でこそ、セントピーターと言われてはいますが、結構失敗と言いますか、私達から見ると、愚かな事をしているなど、というようなことがあります。例えば、ピリポカイザリアというところに行った時に、彼は立派な告白をいたします。「イエス様あなたは神の子です。神のキリストです」。そうするとイエス様は、「それを言わせたのは、まさに神様ご自身の導きであって、あなたはペテロだ。その信仰の告白のゆえに私の教会を建てます」とおっしゃった。そしてこれから起こるご自分の苦難の事を語ったわけです。そこまではよかった。ところがペテロは、そんな事がおきては大変だということで、イエス様ちょっとこちらへと、呼んでいさめ始めた。するとイエス様は、「下がれサタンあなたは、神のことを思わないで、人のことを思っている」。そう言われてしまったのです。サタン呼ばわりですよ。今で言ったら、人格否定ですね。そんな風にペテロは言われてしまいました。

そして、また皆さんがよくご存じの失敗と言えば、「私はあなたを知らないなどとは、決して言いません。他の人がつまずいても、私はつまずきません」と言っていたにもかかわらず、「イエスを知らない」と3度もイエス様を否んだのですね。そして夜が明ける頃鳴いた、鶏の声を聞いて、彼は我にかえって激しく泣いたと聖書は記しています。階段のおどりばにも、エルグレコの“ペテロの改心”というこ

とで、ペテロの目に涙がうかんでいる絵が飾られていたことがありました。けれども、そういうペテロでしたけれども、初代教会の大事な働き人になっていきます。柱になっていきます。立派な人間になっていったんですね。さすがペテロだと。

ところが、それで終わらないのですよ。ガラテヤ人への手紙の2章に、すごいことが書いてあります。パウロの言葉です。「ところが、ケパはアンテオケに来た時、彼に非難するべき事があったので、私は面と向かって抗議しました。・・・しかし彼らが、福音の真理につまずいてまっすぐに歩んでいないのを見て私は皆の面前でケパにこう言いました。あなたがたはユダヤ人で自分がユダヤ人でありながらユダヤ人のようには生活せず、異邦人のように生活していたのにどうして異邦人に対してユダヤ人の生活をしいるのですか」。ガラテヤ人へ手紙2章の11～14なんですけどもこういうことがあったのです。皆さん想像してみてください。パウロは、ペテロからみたら後輩です。弟子の関係でみれば十字架にかけられよみがえられた後に改心をして、教会の大事なリーダーの一人になった人ですね。その後輩があることかみんなの見ていた前であなたには非難すべきことがあると言って非難されてるんですよ。「あなたは確かにユダヤ人で、ユダヤ人と共に食事をしてきた。でもそのうち福音の理解が深まって異邦人とも食事をするようになった。ところがユダヤ人を恐れて、だんだんだんだん異邦人から身をひいてしまっている。あなた首尾一貫していなんじゃないですか」って言われてるわけですよ。

個人的に言われているんじゃないのね。みんなの目の前で言われて、もう、ペテロの立場になったら立つ瀬がない。イエス様におまえはサタンだと言われるよりもっともっとね、彼はぐさっときたんじゃないかと思うんですよ。でもそのペテロも、はっきり聖書に書かれていないから分かりませんが、どこかでそのことをきちんと受け止め悔い改めたんでしょうね。そうでなかったら、パウロと力を合わせて、伝道していく、祈り合っていくことはなかったはずですよ。ペテロは、みんなの目の前で叱られた。しかも後輩のパウロに厳しく叱られた。赤っ恥かかされた。もうもうこれ以上みんなの前にはいることはできない。でもどこかで悔い改めてそして苦難の中にあるクリスチャンの兄弟姉妹を覚えて手紙を2通したためたんですね。そういう人に変えられていったんです。神の忍耐、キリストの忍耐のうちに彼は、砕かれ新しい人に作り変えられていったんじゃないでしょうか。

このペテロの最後の事を小説にした方がいます。ポーランドの作家でノーベル賞作家の方ですけども、その方が書かれた小説が『クオバディス』というものです。映画にもなりました。この『クオバディス』をまだお読みでない方は、古典的なものですけども、ぜひお読みになったほうがいいと思います。ペテロの最後の様子が出てくるんですね。迫害が始まったローマから、ペテロは背を向けてローマを離れようと言って、出てきたんです。そうすると、まばゆい光の人が、自分の方に近づいているの認める。そして言うんですね。「クオバディスドミネ。主よいずこへ行きたもうか」。そうすると、光輝くお方、それはよみがえられたイエス様でしょうね。「ローマへ」というわけですね。そのやり取りを聞いていたペテロと一緒に付き従っていた若者には見えていないのです。ぶつぶつぶつぶつご主人のペテロが言っている事だけしか分からない。向きを変えて歩き始めてから彼は言うんです。原文のまま読

みます。「少年はこれを見ると山びこのごとく先のペテロの言葉を繰り返した。クオバディストミネ、主よいずこへ行きたもう。ローマへ、と使徒は小声で答えた。そしてペテロは引きかえした。」ペテロは引き返したと書いてあります。苦難の満ちているところに、ひき返したのですね。

あなたが背を向けてることないでしょうか？ 苦しい場所だからといって逃げ出してきた置いてきたものはないでしょうか？ でも主がそこへ戻りなさいと言うならばイエス様ご自身が先に行ってあなたのために苦しんでいるということがあれば、私たちもまたそこに引き返して主の苦しみを味わう。辛さとともに幸いを覚えるものとならなければ神様の忍耐がキリストの忍耐が無になってしまうのではないでしょうか。今私たちはこうして色々な制約があるけれども、礼拝をささげることができる。以前のように会うことはできないけれども、顔を見て祈りに覚えることが出来る。キリストの忍耐を我忍耐として、この新しい1週間歩ませて頂き、まことに神様が、立ち帰りなさいと言われた場所へ帰って私どもの歩みをさせていただきたいのです。

お祈りをささげいたします。

私たちを導いてくださる主イエスキリストの父なる神様、私達は賛美歌で歌います。主の手に導かれて。けれども時に私ともその手を振り払って自分の行きたい所に行こうとしてしまいます。でも神様はそんな私どもを御手の中に納めて守ってくださいます。

やがて主の日が到来するときに、あー遅かったというそのようなことがないように、神の忍耐キリストの忍耐の時に、本当に砕かれてあなたに導かれた一日一日を送るものとしてください。私たちの疲れ、私どもの涙、また苦しみを負って下さい。この一週間助け導いて下さいますように。キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン。